

漢字の接辞的用法に関する一考察 (3)

—「性」の品詞転換機能について—

加 納 千恵子

1. はじめに

前稿「漢字の接辞的用法に関する一考察(2)——「化」の品詞転換機能について——」では、品詞転換の機能をもつ漢字に焦点を絞り、N化機能とVN化機能を取り上げて、その記述を試みた。そして、VN化機能をもつ漢字の接辞的用法のうち、特に造語力の大きいとされる「化」について、その用法上の制約などを考察してみた。本稿では、前稿でも少し触れたN化機能をもつ漢字の接辞的用法を再び検討し、その中から意味が形式的で造語力も高いといわれる「性」を取り上げて、日本語教育の立場から考察を加えることにする。

2. N化機能をもつ漢字の接辞的用法

前稿でも取り上げたが、水野(1987)はN化機能を持つ漢字の接辞的用法のうち、接頭辞の数少ない例として「諸」「全」をあげている⁽¹⁾。その根拠は、「諸」は「注意(する)」のようなVNや「困難(な)」のようなAJNにつくが、「諸注意」「諸困難」となると、もはやVNやAJNとしては使えないということである。「全」も「調査(する)」のようなVNにつくが、「全調査」となると、VNとしては使えなくなる。

ただこれらの漢字の接辞的用法の例は、下のようにNにつけて使われるものが圧倒的に多い⁽²⁾。

諸 <●+VN>: 諸注意 諸報告 諸表現

→N

<●+AJN>: 諸困難

→N

<●+N>: 諸問題 諸費用 諸民族 諸機関 諸事情 諸大名
 諸外国 諸項目 諸方面 諸条件 諸物価
 (諸国 諸島 諸事 諸説 諸相 諸氏 諸派)

全 <●+VN>: 全調査 全説明
 →N

<●+N>: 全世界 全人類 全行程 全結果 全人口 全財産
 全勢力 全市民 全議員 全生涯 全日本
 (全国 全軍 全紙 全部 全階 全員 全力 全土
 全店 全館 全巻 全校 全文 全身 全額 全米)
 <●+V>: (全減 全廢 全焼 全壊 全開 全勝 全敗 全治)

したがって、これらの漢字のN化機能はきわめて弱いといわなければなるまい。また、上の<●+V>の2字語に見られるように、「全」はかつてVについて「全減」「全廢」「全焼」などのVNを造語してきたと思われ、古くはVN化機能を持っていたともいえるかもしれない。

ここで、「全」と似た意味で使われる「総」についても見てみよう。

総 <●+VN>: 総生産 総動員 総選挙 総攻撃 総辞職 総点検
 総決算 総指揮
 <●+N>: 総収入 総支出 総所得 総人口 総監督 総重量
 総大将 総工費 総予算
 (総力 総数 総意 総称 総則 総務 総会 総評)

やはりNにつけて使われる例が多いのは「諸」「全」と同じであるが、VNにつく例はむしろ「総」の方が多い。ただ、「総生産」「総選挙」「総指揮」などは確かにN化されていると考えられるが、「総動員する」「総攻撃する」「総辞職する」などはVNとしても使うことができるから、完全なN化機能をもつとはいえないのではないだろうか。

さて、以上のように見てくると、N化機能をもつ漢字としては、やはり接尾辞的用法のほうが優勢である。前稿では、接尾辞的用法の漢字が、それぞれどのような語基についてNを作るかによって以下のような3つの結合の型に分けた⁽³⁾。

1. <VN+●> : ①VNスルタメノ●=手段 (●デ/ニヨッテVNスル)
 ②VNスル●=所 (●デ/ニVNスル)
 ③VNスル●=人/人々 (●ガVNスル)
 ④VNサレル●=人/物 (●ヲVNスル)
 ⑤VNシテイル●=物 (●ガVNシテイル)
 ⑥VNスル●
2. <AJN+●> : AJNナ● (AJNナ●)
3. <その他+●> : いろいろな品詞につく●

中でも、1.のVNにつく型が一番例が多いが、①～⑤の場合には、結合語の意味が「●(手段)デ/ニヨッテVNスル」「●(所)デ/ニVNスル」「●(人)ガVNスル」「●(人/物)ヲVNスル」「●(物)ガVNシテイル」というような文で表せ、接辞的用法の漢字が文中の成分として使われているのがわかる。このような漢字は、N化機能をもつ接辞というより、連体修飾の被修飾名詞のNと同じ役割を果たしているといえるのではないだろうか。また、これらの中にはVNばかりでなくNにつく例も多い。たとえば、「場」は「駐車場」「運動場」「試験場」のようにVNにもつくが、「野球場」「競馬場」「競輪場」「劇場」「スキー場」など、実際にはNにつく例のほうが多いのである。そして、「案」「策」「券」「課」「席」「隊」「客」「語」などのように自立性の高いものも多い。2.のAJNの語基につくものも、「異端児」の「児」,「主流派」の「派」など、同様に考えられよう。

それに対して、1.の⑥の「成功率」や「回転式」のような場合は、「成功する(確)率」「回転する(方)式」とはいえるが、「●ガVNスル」とか「●ヲVNスル」とかいう文の成分となる形にはできないところが上の5つの場合は異なる。ここで、造語例を見てみよう。

率 <VN+●> : 欠勤率 出生率 死亡率 防御率 投票率 発病率
 →N 拡大率 縮小率 視聴率 就業率 結婚率 課税率
 成功率 上昇率 低下率 増加率 減少率 命中率

- <N+●>: 円周率 関税率 弾性率
(税率 利率 倍率)
- <V+●>: (比率 打率 効率 能率 勝率 伸び率 縮み率)
→N

「率」はVNについてN化する例が多いので、N化機能をもつとってよいだろう。また、上の例のように、VをN化してできたと思われる2字語もあるので、3.<その他+●>に入れることもできよう。

一方、「式」には下のように、①儀式、②数式や化学式のような formula、③方式・やり方といった3つの意味があり、①と②の意味の「式」は自立性が高い。したがって、③の意味が最も形式的で、N化機能と呼ぶにふさわしいと思われるが、③の意味でN化する造語例はそれほど多くない。

- 式 <VN+●>: ①入学式 卒業式 告別式 始業式 終業式 表彰式
→N 開会式 閉会式 結婚式 即位式 授与式 宣誓式
落成式 就任式 起工式 進水式 洗礼式
→N* ③回転式 移動式 多発式 組立式
- <N+●>: ①成人式 金婚式 銀婚式
②化学式 方程式 分列式 多項式
③日本式 西洋式 山本式 ヘボン式 イオニア式
(仏式 神式 和式 洋式)
- <N*+●>: ③手動式 電動式 自動式 水冷式 空冷式
→N*
- <AJ+●>: ③(新式 古式 旧式 正式 軟式 硬式 単式
→N* 複式)

ここで注意しなければならないのは、③の意味で使われている造語例の特殊性である。Nにつくもの以外は、すべて「→N*」と書いたが、これは、そのまま、あるいは「の」を伴って他のNを連体修飾する用法がほとんどで、格助詞を伴って文中で使われることがないという特殊なNである⁽⁴⁾。たとえば、VNに「式」がついた「回転式」「移動式」などは、「回転式ノズル」や「移動式家具」といった連体修飾になる用法以外にあまり使われない。AJについてできたと思われる「新式」「旧式」などの例も同様である。また、「手動式」

「電動式」「自動式」「水冷式」「空冷式」などのように「N*」に「式」がついたものもある。ただ、このような語は「手で動かす方式」「電(気)で動かす方式」「自(分)で動かす方式」「水で冷やす方式」「空(気)で冷やす方式」と言い替えることができることから、実際の造語の過程では、「N+V+式」の形でできたのかもしれない。いずれにせよ、「式」の品詞転換機能は特殊なN*化といえるだろう。

さて前稿では、3.<その他+●>のようにいろいろな品詞の語基につく可能性があり、その意味もかなり形式的なものを純粋にN化機能をもつ接辞的用法として考えたいとした。さまざまな品詞の語基について結合語がNになる漢字として、「面」「度」「用」について見てみよう。

- 面 <VN+●>: 管理面 運用面 生活面
 →N
 <AJN+●>: 安全面
 →N
 <N+●>: 物質面 精神面 社会面 経済面 政治面 技術面
 軍事面
 <N'+●>: 国際面
 →N

「水平面」「切断面」などのような2次元空間としての「面」は自立性が高いので例から除いたが、実は2字の造語例では、「内面」「外面」「水面」「月面」「地面」「海面」「紙面」「表面」「側面」「前面」「裏面」「正面」「平面」「多面」「片面」「両面」など、その意味が一番多い。各品詞につく造語例の数を見ても、「面」のN化機能は弱いといわなければなるまい。

- 度 <VN+●>: 加速度 安定度 傾斜度 溶解度 感光度 緊張度
 →N 熟成度 達成度 完成度 集積度
 <AJN+●>: 精密度 高速度 透明度 重要度 危険度 困難度
 →N
 <N+●>: 芸術度 (光度 角度)
 <N'+●>: 知名度
 →N

- <V+●>: (進度 震度)
 →N
- <A J +●>: (高度 硬度 明度 速度 深度 強度 温度 湿度
 →N 濃度 軽度 精度 純度 密度)

2字の造語例には「角度」「速度」「温度」「湿度」など、数値的に表せる「度」が多く、3字語になると、もっと形式的、抽象的な「度合」という意味の例が多くなる。数の上から見るとVNについてN化する例が多いが、A J Nにつく例も見られる。ひところ、あるテレビ番組で「○○度チェック」というのはやって、どんな言葉にも「度」がつくという印象を広めたが、そういう意味では造語力が大きいといえるかもしれない。

- 用 <VN+●>: 作業用 外出用 輸出用 輸入用 防火用 接客用
 →N* 返信用 授業用 会議用 検討用 その他多数
- <N+●>: 工業用 農業用 自家用 男性用 女性用 教師用
 →N* 家庭用 紳士用 婦人用 産業用 その他多数
 (日用 客用)
- <V+●>: (浴用 飲用 食用)
 →N*

「用」は、上のようにいろいろなVNやNにかなり自由について造語できるが、実はN化機能ではなくN*化機能といったほうがよい。直接あるいは「の」を伴って、他のNの連体修飾成分となるが、普通のNのように格助詞とともに文中で使われることがないからである。

以上の結果をまとめてみたのが<表1>⁽⁵⁾である。表中の数字は造語例の数、()内の小さい数字は2字語の数になっている。一番右の欄の矢印の先は、合成語の品詞である。「式」に関しては、3つの意味のうち、③のみを品詞転換機能をもつ接辞的用法として、取り上げた。

この表を見ると、「率」「式」「面」「度」「用」は、さほど造語例が多くなく、また語基の分布も広がっていないことがわかる。この5つの漢字に共通していることは、VNとNにつく例が多いということである。N化機能をもつという点では、VNにつく例が多い「率」と「度」が目立っている。いろいろな品詞につくことができるという点では「度」であろう。「用」は接辞としての造

〈表1：N化およびN*化機能を持つ漢字の接辞的用法例対照表〉

	VN●	AJN●	ADN●	N●	N*●	N'●	→
率	18			3 (2)			→N
式	③ 4			③ 5 (4)	③ 5		→N → N*
面	3	1		7		1	→N
度	10	6		1 (2)		1	→N
用	10 ⁺			10 ⁺ (2)			→ N*

語力は強いといえるが、その機能はふつうのN化ではなく、もっぱら連体修飾に使われるという特殊なN*化といえるだろう。造語例はあまり多くないが、形式的な意味で使われる「式」もN*化機能をもつと見なされよう。

3. 品詞転換機能をもつ漢字「性」の接辞的用法

では、ここで造語力が大きいといわれる「性」を取り上げて、その使われ方や造語上の制約などについて考察していこう。N化（あるいはN*化）機能をもつ漢字の特徴として出てきたことは、「式」や「面」にも見られたように、形式的な意味のほかにかかなり自立的な意味をもっているということである。「性」の場合も、①「～の性質がある／性質をもつ」という意味と、②「～(的)であること」(英語の“-ity”や“-ness”に当たる)という意味と、③「～できること」(“-ability”)という、3つの意味がある⁽⁶⁾と考えられる。そしてもうひとつは「用」と同じく「N*化機能」が見られるということである。

- | 結合の型 | 例 | 結合語の意味 |
|------------------|------------------------------------|---------|
| 1. <VN+●>:
→N | ②生産性・発展性・安定性
連続性・断続性・狂信性
依存性 | ～的デアルコト |

- ③持続性・信頼性・伸縮性 ～デキルコト
感受性・溶解性・適応性
順応性・吸収性・協調性
一貫性・自立性・許容性
- N* ①多発性・放射性・伝染性 ～スル性質ガアルコト
爆発性・潜伏性・流行性
移動性
2. <A J N+●> : ②可能性・多様性・妥当性 ～デアルコト
→N 特異性・特殊性・残忍性
柔軟性・重要性・危険性
必要性・安全性・有効性
複雑性・簡潔性
3. <ADN+●> : ②絶対性・日常性・将来性 ～(的)デアルコト
→N
4. <N+●> : ②社会性・大衆性・現実性 ～的デアルコト⁽⁷⁾
思想性・論理性・規則性
客観性・主観性・市場性
人間性・主体性・現実性
弾力性・宗教性・芸術性
周期性・法則性・階級性
5. <N+●> : ①動物性・植物性・大陸性 ～ノ性質ガアルコト
→N* 海洋性・小児性・神経性
熱帯性・金属性・細菌性
塩基性・アルカリ性・アレルギー性
(水性・油性・毒性・陽性
陰性・酸性)
6. <N*+●> : ①水溶性・不溶性・不燃性 ※～ノ性質ガアルコト
→N* 可分性・可動性・可燃性

耐久性・耐水性・耐火性
 耐湿性・耐熱性・揮発性
 導電性・向日性・吸湿性
 夜行性

7. <N' + ●> : ②国際性・民主性・保守性 ~的デアルクト
 →N 社交性・自主性・必然性
 積極性・消極性・合理性
 一般性・互換性・封建性
 内向性・外向性・後進性
 先天性・後天性・独創性
 指向性・自発性

造語のルールを考えると、②の意味の「性」が一番いろいろな語基につく。1.のVNにつく際には、「～デキルクト」という意味③があるのが他の語基の場合と違っている。どんなVNにつくかという点、継続動詞か瞬間動詞かといえば前者、意志動詞か無意志動詞かといえば後者であろう。①の意味で使われる場合は、もちろんそのような性質が特別だから名付けをするのであって、あたりまえのことにいちいち「○○性」とはいわない。たとえば、「移動性高気圧」というのは、「移動する」という性質を特殊なものとして説明しているともいえる。

「性」は2.のようにAJNにつく例も多いが、N化機能という点では、「さ」と役割を同じくしている。和語のAJやAJN(a.)、そして外来語のAJN(c.)には「さ」のみが付き、漢語のAJNには「さ」と「性」の両方つくものと、「さ」だけのものがある。

- a. 高さ 重さ 長さ 大きさ 美しさ 豊かさ 便利さ etc.
 b. 重大さ 柔軟さ 深刻さ 豪華さ 単純さ 複雑さ
 重大性 柔軟性 ×深刻性 ×豪華性 ×単純性 複雑性
 c. スマートさ ユニークさ ソフトさ ルーズさ

中には「可能」のように「さ」はつけられないAJNもあるが、造語力という点では「さ」のほうが優っているといえよう。

〈表2:「性」の接辞的用法分布表〉

	VN●	AJN●	ADN●	N●	N*●	N'●	→
性	② 7	② 14	② 3	② 3		② 20	→N
	③ 12						
	① 7			① 12 (6)	① 16		→ N*

〈表1〉と同じように、「性」の造語例の数と分布をみると、上の〈表2〉のようになる。

N以外の語基につく例の数の多さを見ても、つく語基の品詞の多様性を見ても、「性」の品詞転換機能が少なくともほかのN化機能をもつ漢字より強いことは明かである。また、①の意味の場合はN*化機能をもつといえよう。

さらに「性」には、「ショウ」と読む造語例もある。

- <VN+●>: 心配性 苦労性
 <V+●>: 冷え性 荒れ性 あがり性 懲り性 のぼせ性
 <AJN+●>: 貧乏性 過敏性
 <N+●>: 甲斐性 貧乏性

最後に、日本語教育の立場からこのような接辞的用法を考える上で重要なのは、その造語ルールや意味ばかりでなく、文中での用法を知ることである。N化機能をもつといっても、できあがったNが普通のNと全く同じに文中で自由に使えるわけではなく、N*やN'のような制約のあるものもある。同じ「性」がついた語でも、「～がある」「～が大きい／多い／高い／強い」「～をV」「～に富む」など、使われる文の型が違っている場合も多い。

たとえば、「可能性」は、「可能性がある」「可能性が大きい／多い／高い／強い」「可能性を探る」「可能性に富む」とすべての型でいえるが、「経済性」の場合は、「経済性がある」「経済性が高い」「経済性を考える」がいえるだけで、「経済性が大きい／多い／強い」や「経済性に富む」とはいえない。これが「人間性」になると、「人間性を尊重する」という型のみで、他の型は使えないのである。

4. おわりに

以上、品詞転換機能をもつ漢字の接辞的用法のうち、N化機能をもつ漢字、特に「性」の造語のルールと用法について、まだ不十分ではあるが、考察してみた。漢字の接辞的用法の研究は、国語学の分野でも古くからなされてきているが、できた合成語が文中でどのように使われるかを記述することも、日本語を学ぶ外国人学習者にとって非常に役に立つと思われる。今回は、時間の関係で文中の用法についての詳しい考察までは手が届かなかったが、さらに考察を続けて、いずれ一覧表のような形で記述することを今後の課題としたい。

注

- (1) 水野は、語基を体言類、相言類、用言類、副言類、結合類の5つに分けており、「諸」「全」は「体言化機能」をもっているという。
- (2) 本稿にあげてある語例は、参考文献中に載せてあったものほかに、角川漢和中辞典、漢英熟語リバース字典、新漢英字典からとったものである。筆者の見つけた例もわずかだが足してある。2字造語については、3字造語の際に見られる作用と共通すると考えられるものだけを()に入れて示した。
- (3) 詳しくは、加納(1990) p. 71~72を参照。
- (4) このような語は、厳密に言えば加納(1989) p. 62で行った品詞分類のNにもN'にも入らないものであるが、ここではNの仲間として「N*」と表しておく。荒川(1986)はこのような語をいちおう「B類(相言類)」に入れ、「B類ではあるが、<ナ>はとらず、直接あるいは<ノ>をとって他の語基の連体修飾成分になる不安定な類である。」と述べている(p. 87)。
- (5) VやA Jにつくもので、2字語だけを作って3字語の例がないという場合は、今回は表からはずした。これらの2字語は、現在は合成語ではなく単純語とする見方もあり、また3字語の場合と異なる分布を示しているのも、より比較対照を容易にするためである。
- (6) 2字語の例の中には4番目として、「女性」「男性」「同性」「異性」など性別の意味で使われるものもあるが、3字語にはそのような造語例がなかったので、今回の考察からは省いた。
- (7) <N+●>の特殊な例として、「民族性」「国民性」のような語があるが、これらは4.の「～的デアルト」という意味でも、5.の「～ノ性質ガアルト」というのでもなく、いわば「民族ノ性質」「国民ノ性質」というべき意味である。例が少ないので、ここには出さなかった。

参考文献

- 荒川 清秀(1986):「一性 一式 一風」『日本語学』VOL. 5, 3月号, 明治書院, pp. 85-91.
- 加納千恵子(1989):「漢字の接辞的用法に関する一考察——形容詞の意味をもつ漢字

の接辞的用法について——」『文藝言語研究 言語篇』第16巻，筑波大学文芸・言語学系，pp. 57-66.

加納千恵子 (1990)：「漢字の接辞的用法に関する一考察(2)——「化」の品詞転換機能について——」『文藝言語研究 言語篇』第18巻，筑波大学文芸・言語学系，pp. 69-78.

国立国語研究所 (1985)：『語彙の研究と教育 (下)』日本語教育指導参考書13。

水野 義道 (1987)：「漢語系接辞の機能」『日本語学』VOL. 6 2月号，明治書院，pp. 60-69.

野村 雅昭 (1974)：「三字漢語の構造」『電子計算機による国語研究Ⅵ』国立国語研究所，pp. 37-62.

—— (1988)：「二字漢語の構造」『日本語学』VOL. 7 5月号，明治書院，pp. 44-55.

阪倉 篤義 (1966)：『語構成の研究』角川書店。

水谷 静夫 (1981)：「和語と漢語の造語力」「ことば」シリーズ 8『和語漢語』文化庁，pp. 73-83.

吉村 弓子 (1987)：「漢字の読み分けにあらわれる統語機能」『日本語学』VOL. 6, 8月号，明治書院，pp. 104-112.

辞 典

貝塚茂樹／藤野岩友／小野忍編 (1986)：『角川漢和中辞典』角川書店

Jack Halpern 編 (1990)：『新漢英字典』研究社

Mark Spahn/Wolfgang Hadamitzky (1989)：『漢英熟語リバース字典』日外アソシエーツ